

進路意識調査アンケートの総評

沖縄国際大学 名嘉座 元一

まえがき

今回は昨年度に実施した大学卒業年次の進路意識調査の 2 回目の実施になる。アンケート項目は前回の調査内容を踏襲しているが、より詳細に学生の就活意識や行動を把握できるように、質問項目の追加や選択項目を若干変更している。

さて、就活を取り巻く環境をみると、2018 年度は様々な動きがあった。やはり人手不足の問題が一番大きな話題であった。全国ニュース等でも人手不足については頻繁に取り上げられ、沖縄でも人手不足の深刻さは話題になっている。企業の求人活動も人手不足を反映して変化しているようである。また、政府の進める働き方改革も企業、学生の動きに影響を与えているようである。今回のアンケートでも学生の意識や行動の変化となって表れているのか興味を持ちながら集計結果を検討した。

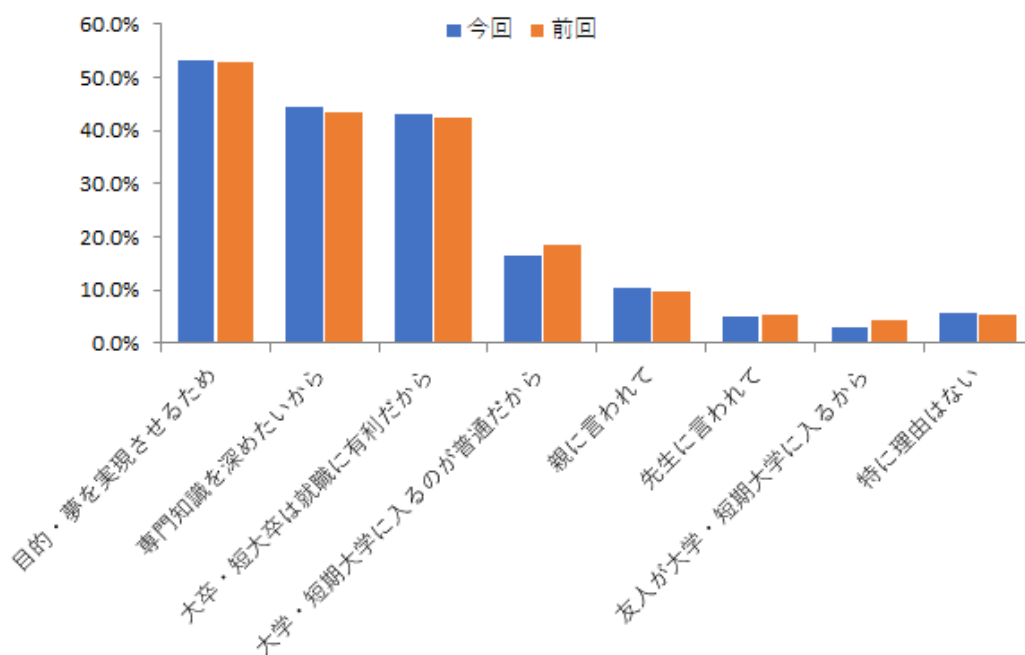
前回と同様に就活に関わる者にとって、関心の高いであろう質問に絞って、総評という形でコメントした。また、昨年度の集計結果もあるので今回の集計結果と比較できる質問については比較検討した。

1. 大学生活について

(1) 入学目的

最初に大学生活に関する設問について見てみよう。問 1 では大学入学の目的について聞いている。その結果は図 1 のようになり、前回とほとんど変化はない。

図 1 大学入学の目的（今回と前回）



(2) 大学生生活の充実度

次に大学生生活の充実度について見てみよう（問 5）。これは今回調査で追加した質問である。これを質問 1 の入学目的とクロスしたのが図 2 である。

なお、入学目的を以下のように大きく 3 つの項目に分けた（これは昨年度と同様な分け方である）。

問 1.大学・短期大学入学の目的を教えてください。あてはまるものはすべてお選びください

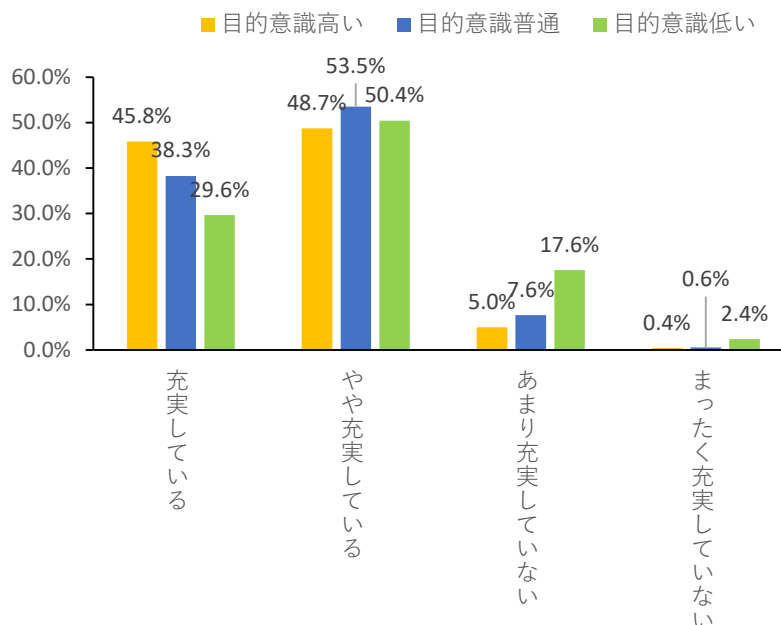
- 1.目的・夢を実現させるため、2.専門知識を深めたいから、3.大卒・短大卒は就職に有利だから
- 4.大学・短期大学に入るのが普通だから、5.親に言われて、6.先生に言われて、
- 7.友人が大学・短期大学に入るから、8.特に理由はない

これを、以下のように 3 つのグループに分けた。

- 1+2=高い意識を持つ学生（高い意識）、3+4=普通の意識を持つ学生（普通）、
- 5+6+7+8=低い意識を持つ学生（低い意識）

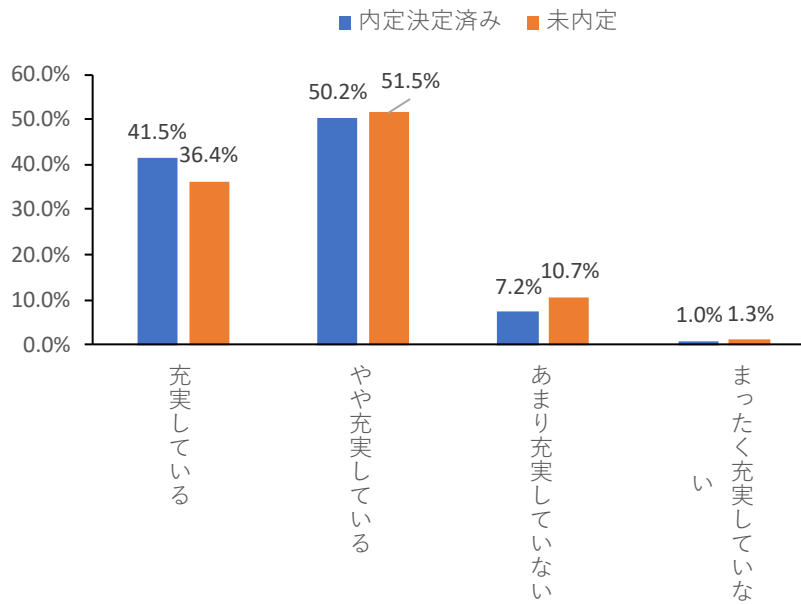
図 2 を見ると、大学生生活を充実している学生は目的意識が高いが多くなっており、目的意識が高いほど充実している学生が多いようである。一方、大学生生活があまり充実していない学生はその逆となっている。大学入学の目的が明確なほど大学生生活の充実度も高いことが分かる。

図 2 入学目的（問 1）と大学生生活の充実度（問 5）



さらに、大学生生活の充実度と就活の結果はどう関係しているのだろうか。図 3 は大学生生活の充実度と内定の有無をクロスしたものである。大学生生活が充実している学生は内定を獲得する割合が高くなっていることが分かる。逆にあまり充実していない学生は内定をもらう割合は低くなっている。大学生生活をいかに過ごすかも積極的な就職活動を通して内定の獲得にも影響を与えることが分かる。

図 3 大学生生活の充実度（問 5）と内定の有無（問 24 現在の状況）



注) 内定の有無は、問 24 において、選択肢 1～5 を“内定決定済み”とし、6～11 までを“未内定”とした

2.就職活動について

(1) 働くことについていつ頃から意識し始めたのか（問 7）

図 4 と図 5 が 4 年制大学と短期大学の結果を昨年度調査と比較した図である。前回と今回ではほとんど変わらない。ただし、4 年制大学ではまだ意識していない学生が今回 5.5%（97 人）と少なからずおり、前回より増えているのが気になるところである。短大でも今回がわずかながら多い。今回調査期間が前回に比べ 1 ヶ月早かったことが影響したのか、また前回に比べ回収数が多く、回収できた学科数が増えたことの影響か、あるいは今年の学生の出足が遅いという我々の感覚を反映した結果であるのかここでは検証できなかった。

図 4 働くことについて常に意識したのはいつ頃からか（4 年制大学）

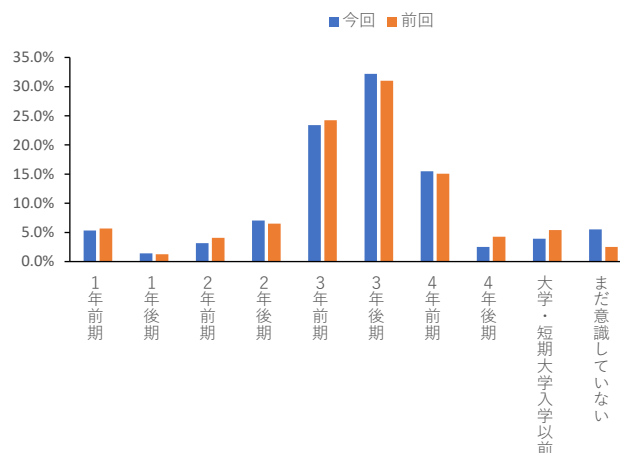
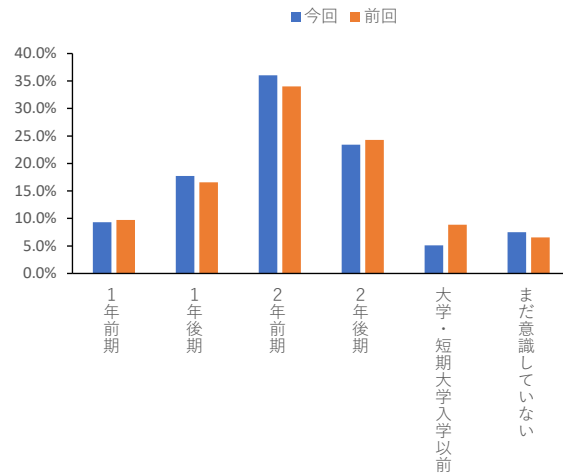


図 5 働くことについて常に意識したのはいつ頃からか（短期大学）



また、入学目的とクロスしたのが図 6 と図 7 である。3 年後期がインターンシップを通じてピークになるのは前回と同様である。今回の特徴としては、前回に比べて意識する時期がやや早くなっている傾向が見られることである。これは特に目的意識の高い学生において顕著であり、前回に比べ 2 年前期までに意識する学生が増えている。また目的意識の普通な学生も高い学生ほどではないが早まっている。企業の求人活動が前倒しされてきている影響があるものと推察される。入学目的の意識が低い学生は、今回も「まだ意識していない」と回答した割合が高くなっている。

図 6 働くことについて常に意識した時期と入学目的クロス（今回調査）

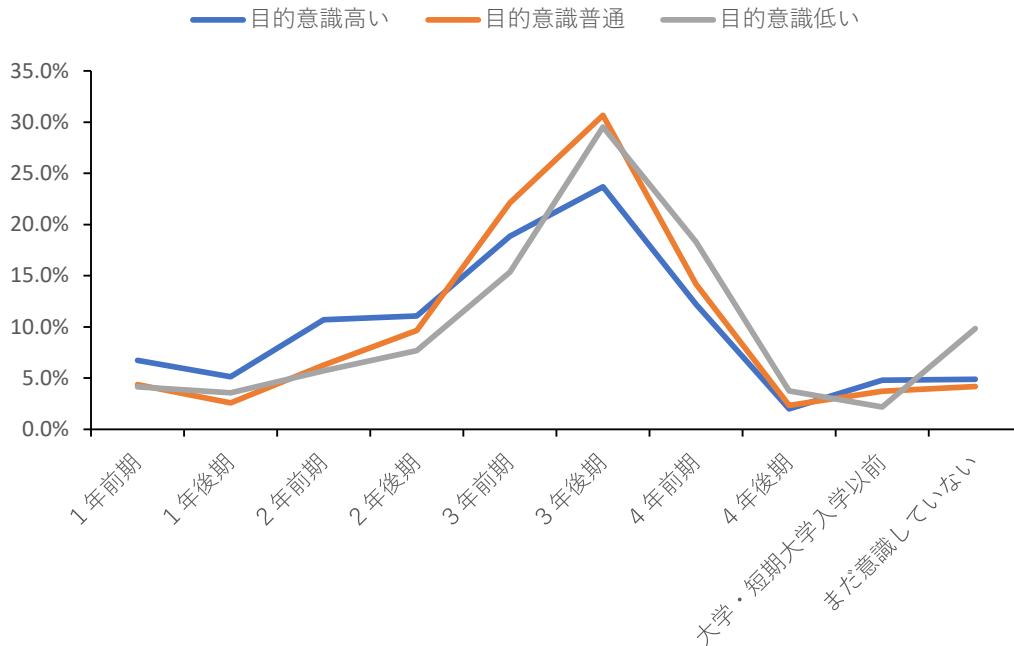
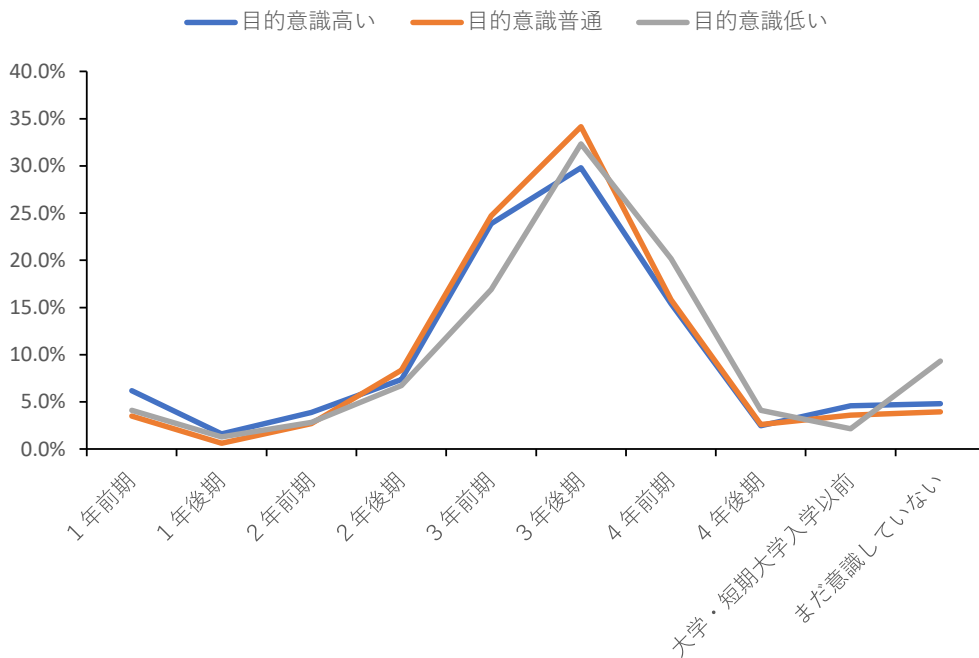


図 7 働くことについて常に意識した時期と入学目的クロス（前回調査）



(2) 働くことについて意識ができたきっかけ

図 8、図 9 は働くことについて常に意識したきっかけについて聞いたものである。これも前回と比較した。なお、前回に比べて選択肢が増えているので、別々の図で示した。

今回できっかけとして最も高いのはインターンシップであり、次いで合同企業説明会と続いている。前回とは順番が逆転しているが、これは人手不足を反映して企業が 1day インターンシップなど短期的なインターンシップを実施するようになったためであろうか。

図 8 働くことについて常に意識するようになったきっかけ（今回）

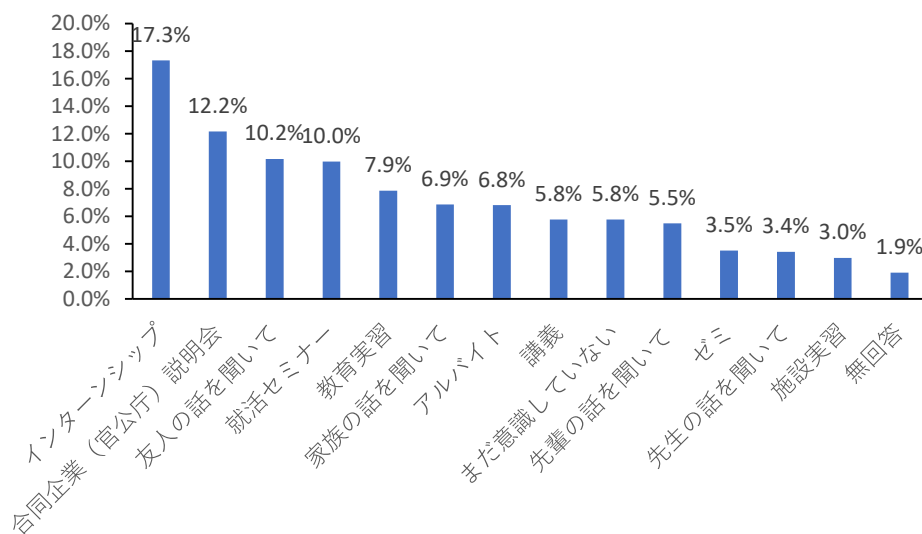
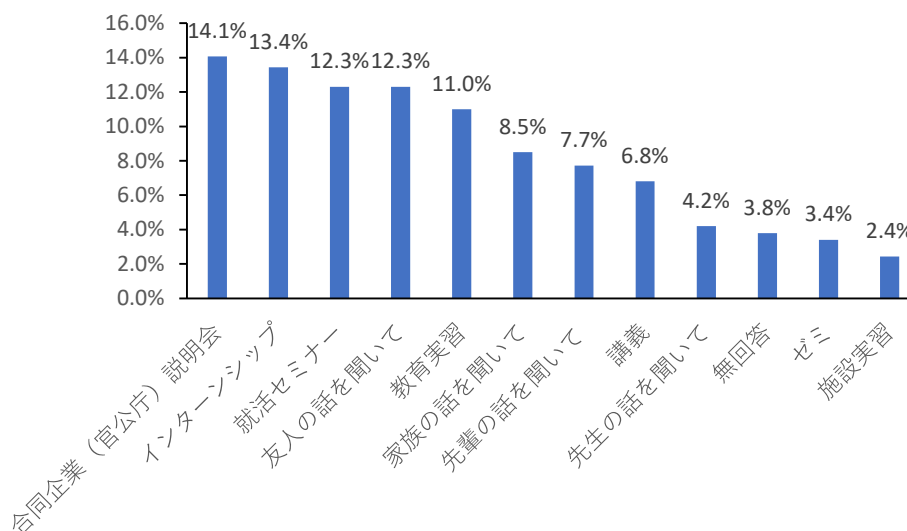


図 9 働くことについて常に意識するようになったきっかけ（前回）



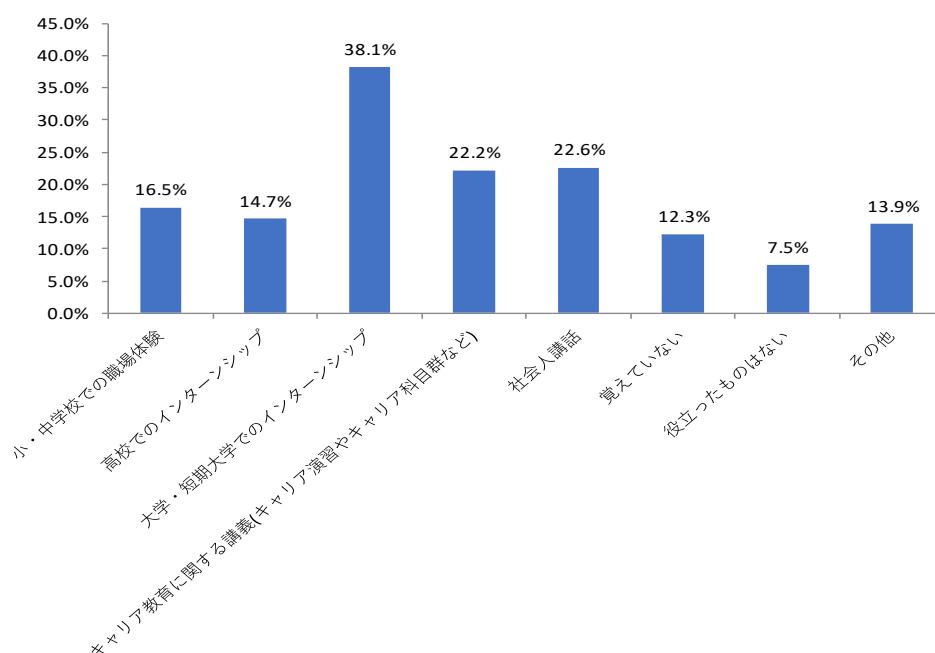
(3) これまでの経験で役だったもの

問 9 では、進路や働くことに関するこれまでの経験で役に立ったものについて聞いている（図 10）。最も高いのが「大学・短大でのインターンシップ」であり、次に「社会人講話」、「キャリア教育に関する講義」が続いている。インターンシップも含め働く現場の人の話が学生にとって重要であることが分かる。キャリア教育においても PBL 形式を積極的に取り入れるなど、企業や社会人との連携を工夫することによって、もっと学生にとって有益になると思われる。

さらに、今回の結果では、小中学校での職場体験が高校でのインターンシップを上回っており、高校でのインターンシップの方が日数も含めて密度の濃いものと思われるのだが、小中学校とほぼ同じと感じられているのは実施の仕方に課題があるのかもしれない。キャリア教育は長期的なプログラムの中で、小中学校、高校、大学と意識が高まるようなあり方が望ましいと考えられるので、インターンシップの実施方法等を含めて教育現場、企業、行政の連携を深めていく必要があると考える。

¹ PBL 形式の講義とは、問題解決型学習（プロブレム・ベースド・ラーニング）のことで、例えば、企業からのミッション（課題）を受けて、学生たちがその解決法を互いに協力しながら提案するというような講義形式である。きわめて実践的であり、学生の自己成長度も高い。

図 10 これまでの経験で役だったもの（問 9）



(4) 就職先に決めた理由について

問 28 では就職先が決定している学生に就職先を決めた理由について聞いている。これは選択肢が多いので図で示すと分かりにくいいため、表 1 のように多い順にまとめてみた。

今回の結果は、第 1 位が「仕事内容」、次いで「福利厚生」、「職員の人柄」と続いている。前回と比較すると、「給与」の順位が下がり、「福利厚生」(前回 8 位) の順位が上がっているのが大きな違いである。

この結果は、政府の掲げる働き方改革の影響で合説等において福利厚生面やワークライフバランスについての説明を強調するようになってきているのか、学生の意識が給与などよりもライフスタイルに合わせた働き方を意識するようになったためであろうか。いずれにしても働く環境を重要視するようになっていくことがうかがえる。

表 1 就職先に決めた理由（問 28 複数回答 n：内定決定者）

	第1位	第2位	第3位	第4位	第5位
今回	仕事内容	福利厚生	職員の人柄	職場の雰囲気	給与
前回	職場の雰囲気	仕事内容	職員の人柄	給与	将来性

(5) 進路を決定した際の相談相手

問 21 では進路を決定する際に相談した学生について聞いている。ここでは問 24 の現在の状況とのクロス分析を行う。問 24 は前回より選択項目が少し増え、内定先が民間か公務員・教職員かが分かるようになっている。

内定先や進路等によって、相談相手にも違いが見られる。どの項目でも家族が相談相手として最も多

い。内定先が“民間企業”の学生は相談相手として「アルバイト先の職員」が多いのが目立ち、内定先が“教職員”の学生は「先生や先輩、友人」が多い。内定先で迷っている学生は「家族」への相談割合が高い。さらに“就活中”の学生は、やはり「学内就職支援機関の職員」が多い。“これから就活を行う”学生や“就活を行う予定のない”学生は「相談していない」が多くなっている。就活で消極的な学生は周りの学生をあまり活用していないようである。

ここで、相談相手が「学内外の就職支援機関の職員」とした場合に絞ってみると、内定が決まっている学生は全体的に相談しているがこれから就活を行う／行う予定はない学生は相談に行く割合が低い。もっと相談していれば内定につながっていたかも知れないので、彼らが訪れやすい環境づくりがもっと求められる。

表 2 相談相手（問 21）と現在の状況（問 24）とのクロス

相談相手	現在の状況	就職先が決定している (企業)	就職先が決定している (公務員)	就職先が決定している (教職員)	就職先が決定している (家業を継ぐ)	就職先が決定している (起業)	就職先が内定している が迷っている	就活中	進学や留学 を行う準備 をしている	進路(就 職・進学な ど)で迷っ ている	これから就 活を行う予 定	就活を行う 予定はない	総計
家族		68.2%	77.4%	71.4%	70.0%	37.5%	82.2%	75.7%	72.0%	74.1%	64.3%	54.2%	69.5%
親戚		6.6%	4.3%	7.9%	10.0%	0.0%	2.2%	7.0%	4.4%	11.2%	5.8%	6.0%	6.3%
先生		27.1%	38.3%	50.8%	20.0%	12.5%	31.1%	36.5%	47.3%	41.4%	29.1%	30.1%	32.8%
先輩		23.6%	24.3%	34.9%	20.0%	12.5%	22.2%	20.6%	23.1%	20.7%	15.1%	13.3%	21.7%
友人		54.0%	47.0%	66.7%	20.0%	25.0%	55.6%	58.1%	48.9%	58.6%	56.6%	42.2%	53.4%
アルバイト先の職員		12.0%	4.3%	4.8%	0.0%	0.0%	6.7%	10.0%	3.3%	11.2%	10.1%	8.4%	9.4%
企業の人事担当者		9.1%	5.2%	0.0%	0.0%	25.0%	17.8%	4.0%	2.2%	0.9%	0.4%	0.0%	5.3%
OB・OG		4.9%	5.2%	1.6%	0.0%	25.0%	4.4%	4.3%	6.0%	2.6%	3.1%	2.4%	4.4%
学内就職支援機関の職員		15.5%	13.9%	9.5%	10.0%	12.5%	24.4%	19.6%	3.8%	8.6%	3.9%	6.0%	12.2%
学外就職支援機関の職員		8.4%	3.5%	1.6%	0.0%	12.5%	4.4%	5.6%	1.6%	2.6%	2.3%	0.0%	5.1%
相談していない		10.6%	11.3%	11.1%	10.0%	25.0%	2.2%	8.3%	15.4%	10.3%	20.9%	31.3%	12.6%

(6) 就職活動の充実度について

就職活動の充実度（問 22）を見たのが図 11 である。「充実している」と「やや充実している」を合わせて 53.7%と卒業年次の半数を超えている。一方、「あまり充実していない」と「全く充実していない」を合わせると 22.5%と約 2 割の人が充実していないと答えている。

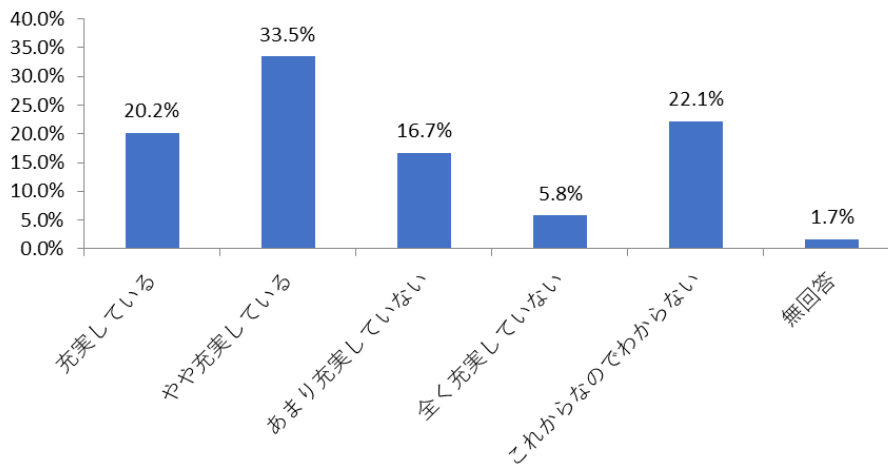
その理由についても自由文形式で聞いており（問 23）、予想以上に多くの学生が回答しているので、その傾向をみた。

「充実している」と回答した学生は、「希望の企業に決まったから、内定が多くもらえたから、就活を通して自己成長に繋がったから」等の回答が多く見られた。「やや充実している」と回答した学生もその理由として「内定が決まったため」というのが多いが、「もう少しがんばればもっと良い企業が見つかったかもしれない」や「内定もらったけど本当に自分にあっているかどうかわからない」など不安になっている回答も多くあった。「充実していない」と回答した学生の理由は、「内定がもらえなかったか第 1 希望に内定がもらえなかった」等の記述が多く、また、「情報を集めるのが遅かった、もっと調べておけばよかった」など早めに就活を行ってほしいという回答も多い。また、「卒論や研究が忙しく就活に集中できなかった」と答えている学生もいた。

ここではそれぞれの理由について整理して書いたが、アンケートに書かれた生の声はもっと切実であり学生の気持ちがそのまま表れているようであった。匿名化しているので、生の声を 3 年次に見せることもいいのではないかな。我々が説明するよりも、学生に響くのではないだろうか。それによって、就活へより積極的に取り組むきっかけとして有効だと思う。支援担当機関でぜひ検討していただきたい質問で

ある。

図 11 就職活動についての充実度 (問 22)



3. 就職支援機関の利用について

就職支援機関の利用状況を見たのが図 12 である。「学内就職支援機関」が最も多く、これに次いで「就活サイト」がよく利用されており、「学外の就職支援機関」の利用度は低い。どんな学生達が利用したのかを見るために、現在の状況 (問 24) とクロスしたのが図 13 である。各就職支援機関の利用状況を“利用している”学生と“利用していない”(「利用していない」と「これから利用予定」の合計) の 2 つに分けた。“利用していない”学生の割合が高いのは、就職先として、「教職員」、「実家を継ぐ」、「起業する」の学生達である。“就職先が決まっている”学生や“迷っている”学生の利用割合は高く、相談機関としての機能を果たしていると言えよう。

図 12 就職支援機関の利用状況 (問 16)

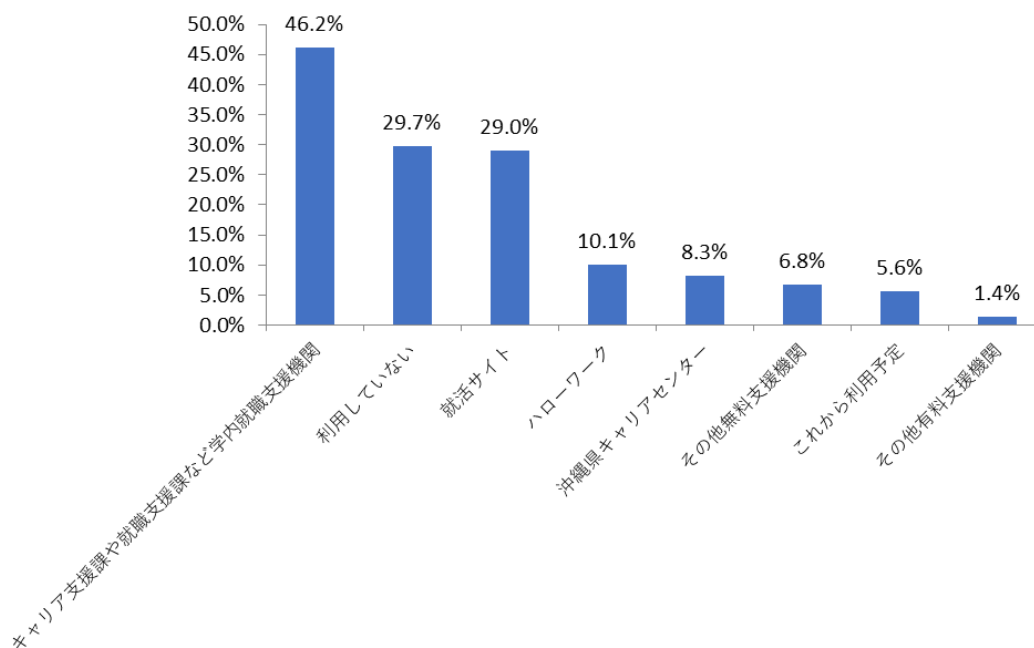
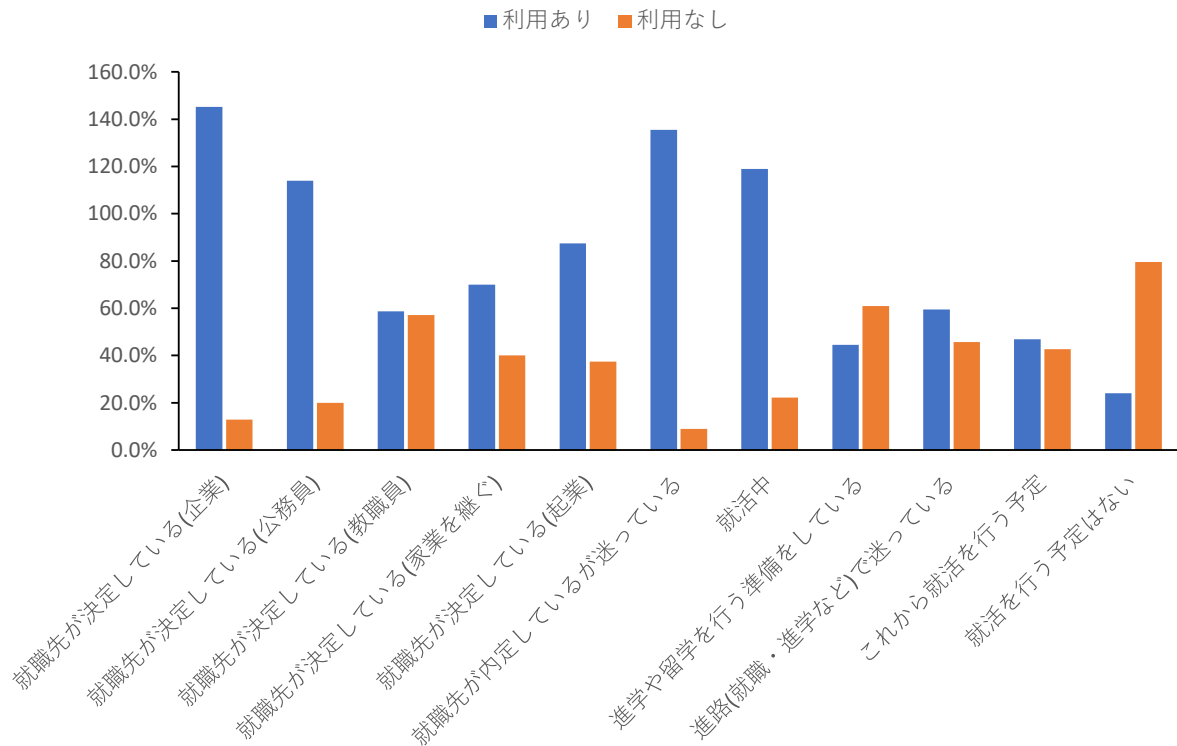
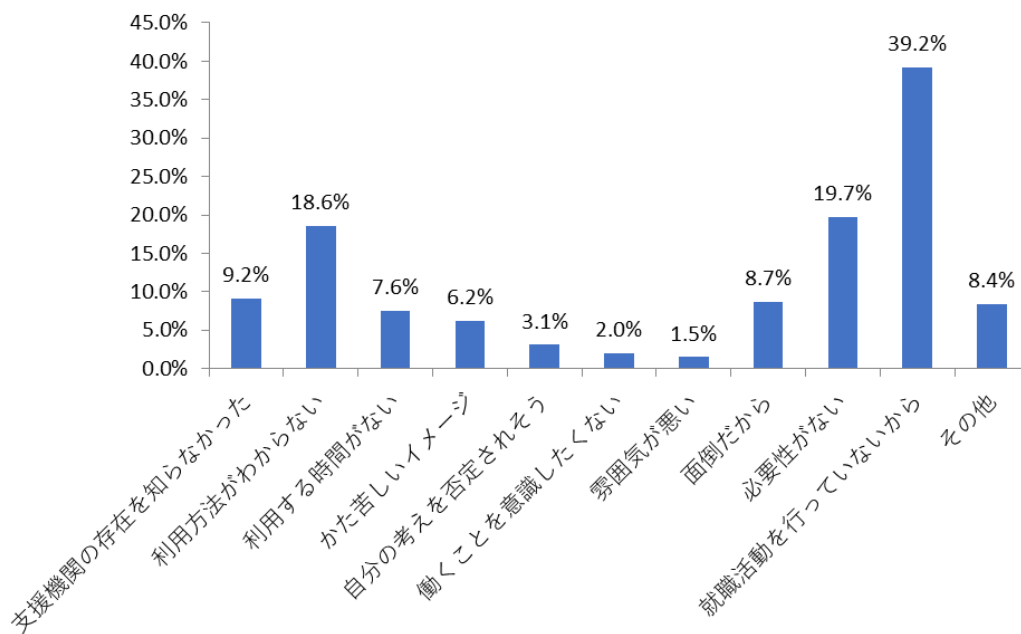


図 13 現在の状況（問 24）と就職支援機関の利用状況（問 16）クロス



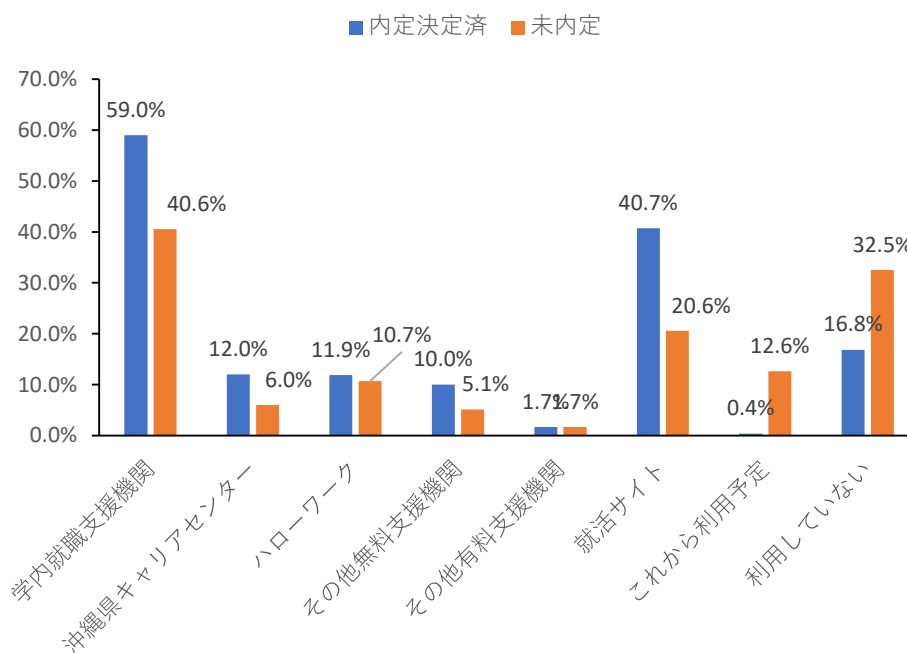
さらに、“利用していない” 学生の理由を見たのが図 14 である。就職活動を行っていないからを除くと、「必要性がない」が最も多く、次いで「利用方法が分からない」、「支援機関の存在を知らなかったから」と続いている。利用を増やすために、講義やゼミ等で実際に訪問してみるなど体験させてみるのが重要かも知れない。

図 14 就職支援機関を利用しない理由（問 18）



では、利用する学生としない学生で就職結果に影響があるのだろうか。そのために、就職支援機関の利用状況を“内定決定済み”と“未内定”の学生に分けてみたのが図 15 である。“内定決定済み”の学生は学内外の支援機関の利用率は“未内定”の学生に比べて高い。一方、“未内定”の学生は就職支援機関を利用していない割合が高い。利用する機会が増えると、就活意欲に繋がりもっと就活を積極的に行うようになると思われる。

図 15 就職支援機関の利用状況（問 16）と内定の有無（問 24）



4.まとめとして

今回は昨年度調査との比較もしながら分析をした。入学の目的については前回と同様な結果となり、やはり目的意識の高い学生は就活への取り組み時期も早い。今回大学生活の充実度について新たに聞いているが、大学生活の目的意識とも相関しているし、充実度の高い学生は内定をもらう割合も高い結果となった。入学目的の意識がそれほど高くない学生でも、大学生活が充実していれば内定につながるとも言え、いかに充実させるか、少なくとも大学で学ぶことの意義を講義等を通じて学生に伝えるのも教職員の課題となっている。

また、インターンシップなどをきっかけにして働くことについて意識するようになっているが、企業独自のインターンシップの機会が増えているために就活への取り組み時期がやや早めになっていることは今回の特徴である。これは人手不足を反映した企業の採用活動が早めになっていることが要因だと思われる。今後、就活協定が廃止されることを考えると、この傾向はさらに強くなっていくと想定される。そのため大学の就職支援機関の対応が喫緊の課題である。

さらに、就職支援機関の利用状況については利用するほど就職に有利になるという結果は明白であるので、引き続き学生への周知が課題である。特に普通の意識を持った学生に対しどのように支援機関の利用を向上させるかの工夫が求められる。

今回、就職活動の充実度の理由について自由文形式で聞いたところ、想定より多くの回答があった。生

の声は、是非各就職支援機関や講義等で利用してもらいたい。

就活の取り組み時期は、経済社会や政治環境の変化によって、変わることが想定され、学生の企業を見る目も少しずつ変わっていくことが予想される。この大学生アンケートが続くことによって、学生の就活への意識の変化を捉え、対応策を考えることができる。その為にも継続的にアンケートを実施することが重要であろう。